

街・建物・暮らし 12

開業100周年を迎えたわずか1・5kmの南海高師浜線・終着駅
～臨海工業地帯に遺された大正モダンの香り高い駅舎～



開業100周年を記念して、今年は夕方になるとイルミネーションに美しく彩られる

写真は南海電鉄・高師浜線の終

点・高師浜駅の駅舎である。

1919（大正8）年10月に開業。今年10月で開業100周年を迎えた。高師浜線は大阪・難波と和歌

山方面を結ぶ南海本線・羽衣駅（高石市）から枝分かれしている。

高師浜線は延長わずか1・5kmの盲腸線で、起点の羽衣駅の他には、伽羅橋駅・高師浜駅（終点）の2駅だけしかない。

高師浜線そのものは、1918年にまず羽衣駅・伽羅橋駅だけでスタート。その翌年に高師浜駅が開業して「全線開通」となった。

いかにも大正モダンの雰囲気を感じられるデザインがいい。正面から見ると「はめぐろし」の窓が計6つあるのが分かるが、下の3つの窓は、駅舎の中から見ると、美しいステンドグラスになっていて、波に群れ飛ぶ海鳥が風流に意匠されたものだ。

現在の高師浜は大阪湾に面した臨海工業地帯だが、近代以前は白砂青松の美しい浜辺として知られ、あの万葉集にも歌われた景勝

地だった。

高師浜線が全通した1919年以降は、海水浴場として親しまれ、高師浜沿線は海辺の閑静な住宅街として開発されていく。

そのような目で高師浜駅の駅舎を見つめ直すと、高師浜駅よりも4年後に開業する東京の田園調布駅、さらにその翌年に完成したJR原宿駅の木造駅舎などとフォルムが似ていることに気付く。

「大正モダン」と大雑把に前述したが、洋館ふうの建物は当時の庶民の憧れをかきたてるものであり、現代人にとってもノスタルジーを感じずにはいられない。

白砂青松の趣はもはやないが、大正時代の頃のこのあたりの雰囲気を残す風景（天然の松林）は、ホーム脇の高石神社の境内に凝縮された形で遺されている。

それにしてもたった3駅の高師浜線。これまでに存続の危機は何度も持ち上がったようだが、現在はその流れも落ち着いたようだ。いつまでも残っていてほしい駅舎である。（砂耳）